下る物の品々
―斎藤徳元『尤之双紙』の遊び心―

森　　暁　子*

はじめに

仮名草子『尤之双紙』（寛永九年刊）は「物は尽くし」を趣向とした作品である。『枕草子』および、それに擬した先行する仮名草子『犬枕』（慶長年間刊）を意識したことが序からわかる。「枕」と名付けることはおそれ多いため、字の片側（右半分「尤」）のみを残して書名を付けたと説明している。上下二巻に各四十段を収める。

著者は俳諧師として名高い斎藤徳元である。もともと美濃墨俣城主で織田秀信に仕え、春日局とも同族の、由緒正しい武士である。本書はそもそも、八条宮家（桂宮家）二世智忠親王の少年時代に奉られたものであることが解明されている。

本稿ではコンソーシアムのテーマ「伝わる・伝える」に関連し、下巻第二十四段「下る物の品々」を題材に、俳諧的なイメージの伝え方を取り上げる。ならびに、古典の知識の伝承という側面からも分析してみる。

一.「下る物の品々」の構成

下巻第二十四段「下る物の品々」には、九つの「下る」ものが列挙されている。原文では続けて記されているが、以下では分かりやすいように番号を付けて分けて示す。

廿四　下る物の品々

①東へ下るは馬の上[1]

②筑紫へ下るは舟の上

③峯のつま木や早蕨をとりて下るは谷の庵[2]

④五月雨の雲は凝り敷きて、ふもとに下る時もあり[3]

⑤秋の梁瀬の鮎うなぎは、ひと村雨のにごり水に、さそはれ下る時しも有[4]

⑥笛琴の音に乗じつゝ、天人下りしためしもあり[5]

⑦雲路を渡るかりがねの、平沙に下る比もあり[6]

⑧谷に切りをく宮柱、水の流れに浮き沈み、引かねど下る事も有[7]

⑨巴豆、大黄や牽牛子は、いづれも下る薬ぞかし[8]

最初は京の都から離れるという意味の「下る」である。①は東の方への陸路（馬上）の旅、②は西の方への海路（船上）の旅と、対の構成となっている。

次は空間的な上下の「下る」が続く。③は峰から谷へという地上の高所から低所への人の移動、④は天から地への雲の移動である。

⑤で魚類の上流から下流への「下る」に転じた後、より規模の大きい空間的な上下の「下る」に戻る。⑥は天上界から人間界へという顕現の意も含み、⑦は野鳥が遠方からやって来て舞い降りてくるという、二重の「下る」意を有するようである。

⑧は③に似るが、より低所へ、谷から平地へ「下る」現象である。

最後に⑨で薬の名が挙げられ、これらはお腹の「下る」薬だよと滑稽に結ばれる[9]。

＊お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任アソシエイトフェロー

『尤之双紙』の特色について、渡邉守邦氏は「「くすむ」の語の多義性を利用して次々と発想を転換させる（下巻第十四段）など、俳諧の連歌に似た連想の意外さにある」と述べているが[10]、ここでも様々な「下る」ものを、イメージを切り替えながら豊富に連ね、末尾に下がかった話題を据えて笑いを誘う構成に、俳諧的な発想が見て取れる[11]。

世捨て人の清い日常の一場面である③や、音曲に感じてありがたくも天人が姿を現す⑥、高貴な建物の建材についての⑧などの品のある雰囲気や、④や⑦のような絵になる自然描写など、ここでは綺麗な話題がいくつも挙げられている。それが⑨で、急転直下で下剤の話になるという落差が、この段の面白いところである。この最後の雰囲気の激変は、十代の親王の顔を綻ばせんとしたものかもしれない。

二. 「下る薬」に向かって

（一） 水の気配

急に下剤という卑俗な存在が躍り出て幕となる「下る物の品々」だが、そうと知ってから見返してみると、実は全体の話題が結末に向かって巧みに構成されていたことが見えてくる。

一つには、水（水分）の要素がちりばめられていることが指摘できる。②の船旅によって早くも現れた水の気配は、④で厚く凝り固まって下方に落ちてきて、⑤では濁った水に変わる。そして⑧では巨大な木材を押し流す大量の水となる。

凝縮されて何やら下方に落ちていくというのは、まさしく下した時の腹部の体感を示すものだろう。濁り水は言わずもがな、激しい大量の水に浮き沈みして流れ落ちていく重量のある塊というのは、水瀉のような、水分量の多い下痢のイメージと重なる。⑤に登場する鮎、鰻のぬめった触感や川魚独特の臭気も、「下る薬」により排出されるものに、一脈通ずるところがあるかもしれない。

また④のぽつぽつと降る五月雨から⑤の強く降ったり止んだりを繰り返す村雨への変化は、下した際の発作にも似通ったところがある。初めは弱く時々であった腹部の違和感や痛み、排便が、段々と頻繁になっていき、最後に勢いよく下すという風情である。

最初は静かだった水が、激しさを増し、濁り、最後には固形物を巻き込んで一気に流れ出ていく奔流と化す。短い段の中で水は様相を変えていき、⑨「下る薬」で起きる現象に集約されていく。

（二） 鳴り響く音

音の要素もまた、結末へ向けて仕込まれたものであろう。

明確に音が意識されるのは⑥の笛琴の音で、天人を呼び寄せるその妙なる調べは、実は具合の悪いお腹から不穏に聞こえ出す妙な音にも通じている。

ここで音を意識すると、続く⑦では雁の飛びながらせわしく鳴き交わす声が聞こえてくる。いよいよ腹具合が危急を告げる状態まで進んだかのごとくで、どっと流れ出る⑧、⑨へと向かっていく。

見返せば早くも①の馬の嘶きからあやしい音は聞こえ出していた。先述の水についても④から⑤で激しさの増していった雨音は、川の濁流の響きとなり、⑧では勢いよく重いものを押し流す轟きへと音が大きくなって、⑨に集約されていたのだった。

以上のような重層的な連想の組み込み方もまた、俳諧師たる徳元の面目躍如たるところであろう。

三. 『伊勢物語』の教養

実に俳諧らしい、卑俗さをいとわず、大らかに腹下しの趣向を凝らしたとみえるこの「下る物の品々」だが、同時に『伊勢物語』を匂わす典雅な遊びも秘めている点が注目される[12]。

①の「東へ下るは馬の上」は、『伊勢物語』第七段以降の一連の東下りの物語をすぐに連想させ

る。第九段で八橋のかかる沢のかたわらに「おりゐて（下りて座って）」休んだという表現があることから、京からのこの長旅が馬上のものであったと解釈できる。五島美術館の蔵する「業平東下り図（伊勢物語富士山図）」（伝俵屋宗達筆と、伝尾形光琳筆とあり）などを見ても業平は騎馬の姿で描かれており、東下りは馬に乗っての旅と認識されていたものと推測される。①は明らかに『伊勢物語』を念頭に置いた表現とみえる。

続く②の「筑紫へ下るは舟の上」は①と対になっているが、これも『伊勢物語』第六十一段を意識したものだろう[13]。次のような話である。

むかし、男、筑紫までいきたりけるに、「これは、色好むといふすき者」と、すだれのうちなる人のいひけるを、聞きて、

染河を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ

女、返し、

名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれぎぬ着るといふなり

筑紫に旅をしたとき、これは色を好む風流者だと当地の女に言われた主人公の男（業平）が、地名を詠み込んだ和歌で女と応酬しあうという物語である。東下りほどの知名度はないものの、『伊勢物語』に熟達していれば、①との関わりから想起できた筈である。

この冒頭に注目すると、「下る物の品々」の中にはほかにも『伊勢物語』からの連想とみえる箇所がある。④の五月雨は、同じく東下りの第九段「富士の山を見れば、五月のつごもりに」を思わせるものである。後世のものだが俳諧付合語集（俳諧に必須である連想の指南書）として名高い『俳諧類船集』（延宝五年自序）にも「八橋参河」－「五月雨」と示されている。

また⑦のかりがね（雁）が登場する段はいくつかあるが、雁が中心的に扱われているのは、やはり東下りの第十段である。

むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむこがねによみておこせたりける。すむ所なむ入間の郡、みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよるとなくなる

むこがね、返し、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。

下った先の武蔵の国で主人公が求婚した女の母は藤原氏出身で、高貴なこの男に娘を託そうと、「たのむの雁」（田の面＝頼む）の和歌を贈り、男も同じ言葉を用いて、それに返歌したという物語である。

このようにみてみると、この「下る物の品々」には、東下りを中心に『伊勢物語』の地方へ「下る」段に登場する語が意識的に選ばれている様子である。また⑥の笛ももしかしたら、天皇の寵愛を受ける女との密通が露見して引き離されるという、第六十五段に関わるかもしれない。ここでは「人の国」（地方）に流された＝「下る」羽目になった男が、女のいるところまで夜ごとに通っては、彼女が折檻で蔵に閉じ込められており会えぬとは知らぬまま、笛を吹くのである[14]。

さて、徳元が『尤之双紙』を奉った智忠親王の父、八条宮初世智仁親王は文事に優れ、古今伝授も行った、近世堂上歌壇の重要人物である。和歌、連歌をはじめ多くの作品を残している。師事していた細川幽斎が、智仁親王への『伊勢物語』講義のために著した注釈書が、その後版行され世上に流布した『伊勢物語闕疑抄』（文禄五年成）である。

すると「下る物の品々」の趣向は、単なる優雅な遊びでなく、八条宮家の教養を智忠親王に伝え

ていく目的のもと、『伊勢物語』の要素を読み取る練習用に意図されたものかもしれない。すでに渡邉守邦氏も

> 和歌、俳諧、説話を豊富に引用することも、『犬枕』に見られなかった本書の特色であろう。これは智忠親王訓育の意味あってのことであろうが、そこにまた、当時の俳諧作者の教養のほどを伺いうる。

と指摘しているが[15]、『尤之双紙』も『伊勢物語闕疑抄』と同様に、文芸と書物の収集で鳴らした八条宮家の教育用にもともと著されたものが、世間に伝播するに至ったものであることを意識しておきたい。

四. 「上るものゝ品々」との関わり

『伊勢物語』の趣向に注目すると、直前の段で、内容からしても対となる下巻第二十三段「上るものゝ品々」との関わりも強く浮かび上がってくる。こちらも記号を付けて内容を分けて以下に示す。

廿三　上るものゝ品々

Ａ春は県召
Ｂ秋は司召
Ｃいなかよりの調物
Ｄ竜門鯉
Ｅ衣川鮭。古歌に、
　昨日たち今日きて見れば衣川
　　裾のほころびさけ上る也
Ｆ又候哉、梢の花を手折人
Ｇ春の野のひばり
Ｈ秋の木の実を求むる猿
Ｉ談義の高座
Ｊ二階座敷
Ｋ心づくしの玉葛
Ｌ葛城、高間、大峯をわけわけて入山伏
Ｍ浅間まうで
Ｎ富士まうで
Ｏめでたく上るは位山
　すべらぎの位の山の小松ばら
　　今年や千代のはじめ成らん
　位山はなを待つこそ久しけれ
　　春の都に年はへしかば
　こむらさきたなびく雲をしるべにて
　　位の山の峯をたづねん

こちらには十五の「上る」ものが列挙され、最後Ｏで「めでたく上るは位山」と地名に引っ掛けて位が上がることを示し、言祝ぐかのように話題を終えている。こちらできれいな結び方をしているため、次の「下る物の品々」の滑稽でひどい結末の落差が、いっそう際立つ構成になっている。

ここで特に注目されるのが、ＬからＮにかけての部分である。Ｌには山に分け入っていく山伏が挙げられるが、山伏＝修行者が登場するのが、同じく『伊勢物語』の東下りの第九段で、駿河の国で出会っている。続くＭの浅間は、やはり東下りの第八段に登場し「信濃なるあさまのたけに立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ」と詠まれており[16]、Ｎの富士は第九段で修行者と別れた後、「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ」と、こちらも詠まれている。

つまり、『伊勢物語』東下りの趣向は、実は前段の後半から連綿と繋がっていたものであったことが判明する。

東下り以外でも、Ａの県召（地方官任命の行事で宮中に「上る」）の話題は、『伊勢物語』第四十四段の、県（地方）へ下る人へ贈られた和歌の物語を連想させるものかもしれない。またＫの「玉葛」は『源氏物語』の人名で、彼女が上京することから「上る」ものとしてここに挙げられ、次のＬの「葛城」を導く序詞的にも機能しているが、これも『伊勢物語』を思わせた要素かもしれない。この語が頭に残ったまま隣接する「下る物の品々」の段③にみえる「峯」、「谷」が目に入った時、『伊勢物語』第三十六段の、自分のことを忘れたようだと恨み言を言ってきた女に贈ったという和歌、「谷せばみ峰まではへる玉かづら絶え

むと人にわが思はなくに」が思い出された可能性がある。

『伊勢物語』の和歌の引用は『尤之双紙』のあちこちに見て取ることができ、「上るものゝ品々」の前段、第二十二段「あだなる物の品々」の後半にも、『伊勢物語』第五十段の、浮気な男女の和歌の応酬が載せられている。正反対の話題で続く「上るものゝ品々」と「下る物の品々」の二つの段では、東下りを軸とした繋がりが見出せたが、他の箇所においても、若い親王の学習用として、単なる引用にとどまらない遊びが隠されているかもしれない。

五. うつろう季節

「下る物の品々」の巧みな構成を、季節の表現の観点からも明らかにしておきたい。

早蕨の収穫される③の春は、④で五月雨の夏となり、⑤で秋に移り、⑦も瀟湘八景の平沙落雁の秋の風景と続く。短い段ながら、春から秋へと季節が移り替わっており、それぞれの季節における「下る」ものを挙げる意図もあったことが読み取れる。

このように季節を意識した表現はほかの段にもみられるが、前段「上るものゝ品々」とはまた異なる形式で季節を示しているところが面白い。前段ではＡの春とＢの秋、ＦおよびＧの春とＨの秋と、春秋が対になって繰り返し現れる構成になっている。この点を見ても、「下る物の品々」が単なる下がかった結びで笑わせようとする段ではなく、知的に綿密に作り上げられたものであることが読み取れる。

おわりに

以上、『尤之双紙』下巻第二十四段「下る物の品々」を取り上げて、豊かな発想の切り替え方と、俗なおかしさへ集約される仕組みが、多分に俳諧的であることを示した。また『伊勢物語』の話題の扱い方からして、先行研究で指摘されているように、これが文事の家たる八条宮家の若い親王に、古典の知識を伝える教本の側面も有していたことがうかがえることについても述べた。渡邉守邦氏のいう「雅に則しつつ雅を離れたところに意義があり」という特徴が[17]、この段にはよく合致するようである。

果たして少年の親王に、いくつも重ねられた連想により示された下し腹の話題はどこまで伝わっただろうか。『伊勢物語』の東下りの話題の数々が隠されていたことは、八条宮家の学問の伝授に資するところがあっただろうか。

徳元の仕組んだ俳諧風味と古典の教養との絶妙な遊びが、この作品をいろいろな興味から享受することを可能にしている。それが、この書物が世に広く伝播した所以であろう。幅広い典拠が、それぞれの箇所でどのような意図で仕組まれたものであるか詳細に読み解くことで、彼の隠した遊びがまだまだ見つけられそうである。

なお、近世の武家の私的な著作の中にみえる俳諧に対する関心の強さからは、俗言を用いたものであっても俳諧が当時の教養として根付いていたことがうかがえる。そのような層からも、『尤之双紙』は歓迎されていたと思しい。今後明らかにしていきたい。

注

1　『俳諧類船集』（後述、以下『類』）に載る付合（連想）で、本稿と関わりそうなものを以下に挙げる。「琴」―「馬上」。
2　『類』に「爪」―「琴」、「馬」。
3　『類』に「五月雨」―「かさなる雲」。
4　『類』に「雲」―「魚のわた」、「雨」―「濁る河水」。
5　『類』に「村雨」―「琴」、「笛」―「琴」、「天人」。
6　『類』に「雲井」―「雁」、「雁」―「琴の音」、「白雲」。
7　『類』に「琴」―「宮所」。
8　『類』に「下（クダル）」―「腹中」、「船」、「西国」、「川」

9　上巻第三十段「黄なる物の品じな」には十種の「黄」のつく薬種の名が記され、また『徳元千句』（寛永九年成）は賦物（特定の事物の名前を詠み込む）の独吟千句で、その第五は「薬種」である。薬に対する徳元の興味がうかがえる。

10 『新日本古典文学大系74　仮名草子集』（平成３年２月・岩波書店）解説。本稿の『尤之双紙』本文の引用はこの本によった。

11　松永貞徳は『俳諧御傘』（慶安四年刊）で「やさしき詞のみをつゝけて『連歌』といひ、俗言を嫌はす作する句を『俳諧』といふなり」と述べている。

12　以下、『伊勢物語』の引用は『新編日本古典文学全集12』（平成６年12月・小学館）による。なお徳元の俳諧論書『誹諧初学抄』（寛永十八年刊）の「好色のおとこ」の項目の筆頭に「一業平　すてに女になしてみまほしき美男と云り。色このめる品々、尽しかたし」とある。

13 『類』に「筑紫」―「染川の里の女」

14　第七段からの東下りの話題は、第六段の二条后をさらいそこねた話題の後に始まるが、この第六十五段もまた二条后に関わるものである。

15　注10に同じ。

16　この和歌では煙が「上る」要素もある。

17　渡邉守邦氏「『尤之双紙』考」（「実践国文学」41、平成４年３月）

この度のコロナ禍により、資料および先賢の論考を十分参照することができず、不備が多いであろうことをお詫び申し上げます。